京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十四卷 第三號

昭和十七年三月

論叢

資本主義的論理續論……經濟學博士 柴田敬

ナチス社會保險の經營原理……經濟學士 中川與之助

金本位の廢棄と支拂準備……經濟學士 中谷實

錢莊業の機構……經濟學士 德永清行

時論

大東亞戰爭と經濟建設……法學博士 神戸正雄

研究

日本綿業確立期に於ける貿易政策……經濟學士 松井清

佛領印度支那貿易の性格……經濟學士 河野健二

岩瀨忠震の開國交易思想……經濟學士 松木順

說苑

李孤帆著「招商局三大案」……經濟學士 鈴木總一郎

附錄

彙報・外國雜誌論題

第五十四卷　二七〇　第三號　三二

金本位の廢棄と支拂準備

中谷實

一　序言

生産力の擴充、特に戰時に於けるが如く利用し得可き總ゆる資源を動員して生産力の增大せらる可き事の要請せられる場合に、通貨政策の面に於ては、信用の擴張通貨の膨脹が其の起動力として避け得ざる必然の手段たる事は言ふ迄もない所である。唯問題は、信用擴張の有效限度が何處に存するかと言ふ點であつて、平時にあつては銀行の流動性が第一次的に問題とせられるのであるが、戰時の如き場合に於ては、それは寧ろ常に與へられたものとして、信用基本の側より信用擴張の有效限度が論議せられるのが常である。[1] 然らば斯かる流動性の考慮は何故一應不問に附され得るか。それは戰時に於ける信用擴張が戰爭遂行の爲めに換言すれば軍需生産力の擴充の爲めに要求せられるのであり、從つて國家目的の完遂の爲めに要求せられるのであるから、此れが爲めに起る所の銀行流動性の危機は國家自らによつて保障せられるものと考へられるが故であらう。而して斯かる保障の形式は幾多存するであらうが、最も一般的なものとして考へられるは國家による支拂保證の形式であり國家による支拂準備の保障である。

翻つて、金本位制下に於ける一國の通貨組織は一般に金を頂點とするピラミッドの型によつて說明せられてゐる。卽ち流通面に於ける通貨の大半は預金通貨より成り、此れがピラミッドの底邊をなしてゐるが、其の預金通

1) 拙稿、信用の生産性（經濟論叢、第五十二卷第五號）

貨は銀行の現金準備によつて準備せられ、現金通貨は又ピラミッドの頂點に當る中央發券銀行の金準備によつて準備せられてゐるのである。而もピラミッドの型によつて示されるが如く、右の準備が全額準備ではなく一部準備であり乍ら各銀行の流動性延いては通貨流通の根據が如何にして與へられてゐるか。純粹形式的に見れば、預金は現金通貨による引出に遭ふ可きもの現金通貨は金兌換を要求せらる可きものではあるが、預金者の總て又は大多數が同時に預金を引出すものではなく、又現金通貨の保持者が同時に金兌換を要求するものではなく、一定比率の小額の準備を以て引出又は兌換に應じ得べしと云ふ蓋然性が各銀行の流動性を保證してゐると考へられるでもあらう。然し乍ら斯かる說明の基礎をなせる所の總ゆる通貨流通の根據を金に求めやうとする純粹金屬主義の立場よりは、苟しくも現金準備金準備が全額準備でない限りは、各銀行の流動性從つて各種通貨の流通根據が說明せられ得ざる筈である。そこで、預金銀行又は信用銀行の流動性は單に現金準備のみを以ては與へられず、現金流動性のみならず銀行資產の流動性によつて銀行の流動性が保障せられてゐると言はれるのであるが、此の銀行資產の流動性とは、それが自働的に一定の期日に現金化せられる場合でも又は市場へ賣却する事によつて現金化せられる場合でも、畢竟資產が現金通貨に換えらる可き事を必要とする。而も換えらる可き現金通貨が中央銀行より發行せられるものなる限り、中央銀行は其の保有にかゝる金準備のみを以ては流動性を與へられず、中央銀行の流動性も亦中央銀行資產の流動性によつて保障せられねばならぬ事となるであらう。而して此の場合には、中央銀行が其の資產と交換に國內又は國外より金を獲得し得る事の保障のない限り、中央銀行の流動性は完全に與へられて居ないと云はねばならぬのである。

斯くて、純粹金屬主義の立場に立つ限り、右の如き現實と矛盾したる結論が導き出されねばならぬのみならず、

前述の如く、國家が支拂を保證し銀行の流動性を保障すると言つても、それは全く不可能の事と云はねばならぬであらう。殊に現實の世界を見れば、一九三一年以來各國共に事實上に於て金本位を離脱し、一九三九年には第二次歐洲大戰の勃發に前後して、獨英兩國共に中央銀行の正貨準備を廢止したのである。[2] 我國も亦昨年四月より最高額制限制度を採用して、準備としての金銀及び其の他諸證券の間に於ける區別を撤廢したのであるが、更に今般の日銀改組案によつて、名實共に銀行券の金兌換制度が廢止せられる事となつた。斯くて金本位の廢棄せられたる曉には支拂準備は如何なる意義を持つ事となるか。それは從來と異りたる意義を持つものか或は然らざるものか。又支拂準備は本質的に何を以て準備するものであるか。此れを考察する事によつて、此の角度より、通貨流通の根據從つて貨幣の本質をも檢討する事が出來るのである。

二　通貨と準備貨幣

通貨の範疇については議論の餘地も存するであらうが、一般には鑄貨紙幣銀行券等の現金通貨と預金通貨とに限定する事が出來る。從つて手形の如く、最終的な支拂手段ではなく又時として其の購買力に於て他種の通貨との間に開きの存する事あるが如きものは、此れを通貨の範疇より除外する事が出來るのである。今此の前提の下に於ては、各種の通貨は各々其の成立の事情を異にし又其の流通領域を異にしても、其の購買力に於ては何らの差異も存しない。即ち各種の現金通貨と預金通貨との間に於ても、又所謂實質的預金と創作的預金との間或は本源的預金と派生的預金との間に於ても、其の購買力に於て些かの差異も存しないのである。而も金本位制度の下に於ては、形式上、現金通貨の一部が預金通貨の準備貨幣となり金が現金通貨特に銀行券の準備貨幣となつてゐ

2) Gesetz über die Deutsche Reichsbank vom 15 Juni 1939. 銀行通信錄（昭和十四年九月二十日、第六四四號）

るのであるが、各種通貨の價値乃至其の購買力は其等の準備貨幣によつて支持せられてゐるのであらうか。勿論歴史的には、貨幣が其の素材價値によつて流通し其の素材價値によつて購買力を持ち得たと見らる可き事情も存したであらうし、總ゆる通貨の價値乃至購買力は金のそれに歸せらる可きものと考へらるゝ事情も存したであらう。然し乍ら近代に於けるが如く、社會組織市場組織に對する信認が貨幣の職能價値を成立せしめるに至れば、各種の通貨は最早や何らかの實體價値に基いて其の一般的購買力を保持するものではなく、各種の財貨勞務は右の如き信認に基く所の通貨の一般的購買力に對してのみ交換せられる事となるのである。

斯くて各種の通貨と其の準備貨幣との關係は、純粋金屬主義に於て考へられるが如くに、各種通貨の價値乃至購買力が準備貨幣の其等に依存すると云ふが如きものではなく、要求拂預金の現金による引出しは單に預金通貨より現金通貨へとの通貨形態の轉換に過ぎず、銀行券の正貨兌換も亦同樣の關係である。卽ち預金は現金引出によつて通貨としての存在を消滅し、銀行券も亦正貨兌換によつて流通界より姿を消すものであるから、準備自體は一種の通貨をば他種の通貨に轉換し得る能力の表示に過ぎぬとも云ひ得るであらう。フツパートも亦此の點を强調し、「通貨に對する準備と云ふ言葉はそれ自身に矛盾を持つものであつて、準備規定の課題は、通貨の價値をば其の準備に存する他種の價値によつて保證せんとするものではない。それは、誰が支拂手段を創造し又如何なる條件の下に此れを他人に許與す可きかを規整する事によつて、支拂手段に秩序を與へるものであり、その事が又支拂手段に購買力を與へる前程である」と述べてゐるのである。[3]

以上は各種通貨と其の準備との關係を稍々形式的に考察したのであるが、然らば預金支拂準備及び正貨準備は實質上如何に理解せられ又せられる可きであるか、更にそれは金本位の廢棄によつて如何に影響せらる可きであ

3) W. Huppert; Währungsdeckung (Finanzarchiv Neue Folge, Band 8. Heft 2, S. 320.)

るか。

三　預金支拂準備の意義

先づ近代の預金銀行及び信用銀行に於ける支拂準備について見るに、それは一面に於て銀行の流動性を確保す可きものなると同時に、他面に於ては預金通貨の價値乃至購買力の裏付けとして考へられて來たのである。謂ふ迄も無く銀行の存立は其の流動性に依存し、銀行の流動性は其の全資產の流動性從つて其の換金性に依存する。即ち銀行の債務たる預金が要求拂であつて、何時にても現金引出に應ぜねばならぬに對して、此れに應じ得る能力が即ち銀行の流動性であるから、銀行の全資產は同時に預金に對する支拂準備と見なければならないのである。又銀行の要求拂預金が預金通貨として通貨の一種に數へられ得るのは、預金が銀行の債務であり債務者たる近代銀行が絶大の信用を有するが爲めであるが、更に此の銀行信用は銀行の流動性從つて現金による債務の支拂能力に基くものと見なければならないから、支拂準備が完全なる限り預金通貨の價値乃至購買力が現金通貨のそれによつて支持せられてゐると見る事も強ち無理からぬ所であらう。

然し乍ら銀行の支拂準備は無條件に現金による債務の支拂を保證してゐるであらうか。銀行の支拂準備即ち全資產の中で、第一次準備金と呼ばるゝもの即ち手許現金と中央銀行に於ける預金とは謂ふ迄もなく此の要求を滿すであらうが、斯かる第一次準備金は全資產の一小部分にしか過ぎず、同時に又全債務の一小部分にしか過ぎないのである。殘餘の準備即ち資產は、此れを個々の銀行について見る限り、金融市場の發達に伴つて此れを現金通貨に換え得る可能性が增大するであらうが、總ての銀行に現金引出要求が增大するが如き場合に於ては斯かる可能性に倚據する事が許されないであらう。唯現實に於ては、要求拂預金とても一時に全部が現金による引出要

求に會ふものではなく、平常は相當割合の額が預金として銀行に殘され居るが故にのみ、比較的低率の現金準備を以て銀行流動性が維持せられてゐるに過ぎないのである。[4]

斯かる事情の下に於て、我々は、預金通貨の價値乃至購買力が現金通貨のそれによつて保證せられてゐると見る事が果して正しいであらうか。成程、預金が通貨乃至支拂手段として用ひられるに至つたのは、近代に於ける銀行信用の大なるに基く事は云ふ迄もないが、世人が財貨勞務の對價として預金通貨による支拂を以て滿足するのは、それが何時にても現金通貨に換え得られるが爲めであると見るよりも、預金そのものゝ購買力に對する社會的信認に基くと見る方がより妥當なのではなからうか。現時の諸國に於ける預金通貨による多額の取引を見る時、我々は此れを肯定せざるを得ないであらう。勿論此の見解に對しては此れを反駁す可き材料が決して存在せざる譯ではない。例へば銀行信用が破綻して預金の取付が起る事も屢々目擊せられる所であり、此の事實は預金通貨の價値乃至購買力が全く現金通貨のそれに依存する事を立證するものとも見得るであらう。然し乍ら斯かる預金の取付は、異常なる信用危機に起る現象であつて、極端なる場合卽ち一國貨幣制度の崩壞する貨幣恐慌に至つては、銀行券は言ふに及ばず如何なる貨幣も亦それ自身の價値乃至購買力を持ち得なくなるのである。[5] 卽ち預金取付の起るが如き信用機構の崩壞する時には、公衆が預金通貨の價値乃至購買力に對する信認を失ひ銀行券其の他の現金通貨を要求するのであるが、此の際と雖も、數日のモラトリアムによつて人心が沈靜するに至れば、自づと又銀行信用が確立し預金の購買力に對する社會的信認が回復するに至るであらう。又此の場合に公衆が預金を銀行券等の現金通貨に換えんと欲する所以は、銀行券が金に兌換せられるが爲めに通貨の價値を金の實質價値に於て保有せんと欲するが故ではない。形式的には、銀行券が法貨なるが故に其の購買力が法律によつて保證せ

4) 拙著、預金通貨の研究、第三章、第三節、參照。
5) 森川太郎、銀行流動性の機構（關西大學創立紀念論文集、三八八—三八九頁）

られてゐると云ふ點に、其の需要せられる理由が求め得られるであらうが、實質的には、社會秩序によつて賦與せられたる銀行券の購買力に對する信認が未だ喪失せられ居らざる事に依ると見る可きであらう。而も預金通貨の購買力に對する社會的信認が已に消滅したる曉に、銀行券の購買力に對する社會的信認が未だ喪失せられざる所以は、預金銀行又は信用銀行と中央銀行との兩者に於て、銀行の性格其の營業原則及び支拂準備規定等に關して、前者がより個人主義的なるに反し後者がより全體主義的であり、從つて社會秩序の要求に一層よく合致せるが爲めである。

斯く見來れば、預金銀行及び信用銀行に於ける支拂準備の實質的意義は、單に預金通貨を現金通貨に轉換する事の保證たるものではなく、況んや預金通貨の價値乃至購買力を現金通貨のそれを以て保證せんとするものではない。通常、支拂準備の意義乃至存在理由を說くに當つては、(一)日常の出納資金たる可き事、(二)手形交換尻の決濟資金たる可き事及び(三)不時の現金需要に應ず可き資金たる可き事の三つが擧げられ[6]、特に第三の點に支拂準備の最も重要なる職能を認めんとするものも多いのであるが[7]、右に述べたる所によつて、金本位制の下に於ても尙斯かる職能の充分に果され難きを知り得るであらう。否逆にフツパートの如きは、銀行主義的な從つて又古典貨幣的な立場より、「流通界が預金通貨で滿足せる限りは銀行はいくらでも預金通貨を創造し得可く、預金通貨には特別の準備を要しない」[8]とまで極言してゐるのである。然らば支拂準備の意義は何處に求めらる可きであるか。既に前述の如く、預金通貨の購買力或は其の一般的交換手段たる性格は社會的信認によつて賦與せられてゐるに對し、預金通貨を供給する所の銀行は營利を追及する私企業であり、而も近代銀行は信用の擴張卽ち預金通貨の供給によつて最大の利潤を擧げ得るのである。而も銀行の存在が其の流動性に依存し銀行流動性が先づ其の支拂

6) 田中金司、新庄博、銀行經營論、一二八頁。
7) 例へば Bagehot, Lombard Street, p. 25. Jaffé, Das englische Bankwesen, 2. Aufl. 1910, S. 296, 298.
8) W. Huppert; a. a. O. SS. 324, 325.

準備によつて確保せらる可しと考へられるならば、支拂準備こそが、利潤の追及を念とする私企業たる銀行の恣意的なる活動を制禦し、以て社會秩序の維持に協力せしむ可き課題を荷へるものと考へても差支なき所であらう。所謂金融統制の基礎的條件として、支拂準備の法定が各國に於て實施或は奬揚せられてゐる所以も亦茲に存するものと言ひ得可く、斯かる觀點よりして、「支拂準備規定は支拂手段に秩序性を賦與するものであり、此れが又支拂手段に購買力を賦與する前提でもある[9]」と云ふフツパートの言に聽く可きものが存するであらう。

四　正貨準備の意義

預金の支拂準備が、前述の如く、社會的秩序の維持と銀行の恣意的な活動とを調和せしめる事によつて、預金通貨の購買力乃至貨幣性の前提を與へるものならば、中央發券銀行に於ける正貨準備も亦銀行券に對して此れと同樣な關係に立つ事に於て其の意義を認めらる可きであらうか。此れが解答を先に一言すれば、前世紀に於けるが如く尙多數の發券銀行が併存し、而も各自が私企業的な性格を多分に持つてゐた時代に於ては右の如き事柄が認め得られたのであるが、近代に於けるが如くに公的な性格を持てる中央銀行のみが銀行券を發行するに至れば、右の如き事情は次第に妥當性を失ひ、正貨準備そのものの意義が輕減し來つたと言ふ事が出來るのである。而して、正貨準備の置かるゝ理由は、通常(一)銀行券の兌換確保、(二)銀行券の數量制限及び(三)貨幣の對外價値の維持等に求められてゐるが故に[10]、以下此等の諸點について然る所々を考察しやう。

先づ銀行券の正貨兌換が問題とせられるのは、銀行券の價値乃至購買力が準備たる金の價値によつて裏付けられるものとの思想に關聯する。而して斯かる金屬主義的な解釋は、多數の私立發券銀行が併立して自己の利益の追及より銀行券の濫發を行ひ、以て社會秩序及び貨幣制度を攪亂せしが如き時代に於ては成程重大なる意義を持

9) a. a. O. S. 320.
10) 楠見一正、正貨準備の意義の變化（經濟學雜誌、第五卷、第五號、三五頁）

ち得たでもあらう。即ち斯かる思想の下に於ては、銀行券の發行制度に關しても自ら全額準備又は此れに近き制度が要求せられるであらうし、公衆の側に於ても流通銀行券の金による價値保障に絶えざる關心を持たしめられるであらうが故に、攪亂的な金融恐慌を或は未然に防がしめる事となつたかも知れない。然し乍ら、少く共銀行券の發行が公的性格を帶びたる中央銀行に集中せられんとの傾向が表はれた時代に至れば、最早や銀行券は兌換せらる可き金の素材價値の爲めに流通するものではなく、其の購買力乃至價値は流通界自體より賦與せられる事となる。即ち發券準備の制度が全額準備より一部準備へと移り、更に此れに限外發行制度の如き彈力性が與へられるに至つた事は、一面に於ては流通銀行券の全部が正貨兌換を要求せられるものでないと云ふ蓋然性に基くものとも言ひ得るであらうが、實は銀行券の價値が金の價値より解放せられ來つた事を示すものであり、此の事は、彼の英蘭銀行がピール條例の一時的停止によつて却つて恐慌を沈靜せしめた事例によつても明らかである。殊に正貨兌換が一般的に停止せられた近年の各國に於ける銀行券は、其の流通の根據を正貨準備たる金の價値に歸せしめるが如き事を如何にして許し得やうか。茲に至つては銀行券の購買力乃至價値が全然金のそれより獨立せしめられたと云はねばならぬのである。

次に、正貨準備の意義が銀行券の數量を制限するにありと云ふ點について見るに、これ又多數の私立發券銀行の併存せしが如き時代には誠に重要な意義を持つたに相違ない。蓋し、發券銀行の正貨準備が假令全額準備を要求せられてゐなく共、其の發行にかゝる銀行券の流通高は金在高の增減に應じて增減せねばならぬが故に、銀行券の濫發を防止し從つて銀行券の價値を維持する爲にも役立ち得たが故である。即ち、銀行券の價値は準備たる金の價値に依存するものではなく、又本來貨幣の價値は其の準備たるものゝ形式及び種類に依存するものではないが、而も尙其の數量に依存すると云ふ數量說的な命題は此れを否定し得ないが故である。斯くて銀行券の價値

維持の爲めには何等かの標準に從つて銀行券數量の制限せられる事が必要であるが、此の目的の爲めには金準備よりも寧ろ商業手形による準備の方が勝れりとも考へられる。[11] 蓋し金數量の增減と一國國民經濟に於ける銀行券需要量の變動との間には必然的なる關聯を認め得ざるに反し、中央銀行に再割引を要求せられる商業手形の數額は流通界が必要とする銀行券の增加量を表はすものとも見られるが故である。勿論立入つて考察すれば、預金通貨の發達せし近代に於ては、再割引を要求せられる商業手形の數額が必ずしも流通界の必要とする銀行券のみの增加額を反映するものではなく、況んや當該國民經濟に於ける全般的經濟活動の消長を反映するものでもない。殊に商業手形の割引步合如何が其の割引需要額を左右し得るであらうし、更に流通界の通貨需要と直接の關聯を持たざる國家の貨幣需要が益々重大なる意義を持つ事となれば、寧ろ國債準備の意義の方がより高く評價せられねばならぬであらう。[12] 從つて素朴的な古典貨幣觀から商業手形準備を推す事は全く許され得ないのであるが、少く共、正貨準備が銀行券の數量を制限する點に其の意義の一つを認めんとする事は一層强き意味で支持され得ない事が明らかであらう。現に、各國の發券制度に於ける推移は明らかに此の事を裏書するものであつて、正貨準備率の減少、保證準備發行額の相對的擴張、及び限外發行制度の利用の增大等は其の具體的表現に他ならない。

最後に正貨準備の意義の一つとして、それが國際貸借又は國際收支の最後の決濟手段であり從つて貨幣の對外價値を維持するものであると云ふ事が强調せられる。成程近代迄の國際關係に於て見られしが如く、世界經濟が大體に於て各々獨立したる國民經濟の單なる集合體として形成せられし時代に於ては、國際間に於けるバランスの決濟手段として金の如きそれ自身に素材價値あるものが必要とせられた事は云ふ迄もない所である。蓋し各獨立の國家群によつて形成せられたる國際經濟に於ける社會性は、一つの國民經濟內に於ける個別經濟の間に於て形成せられる社會性とは本質的に其の趣きを異にし、國民經濟に於ける社會的信認が實質價値なき貨幣に其の一般

11) W. Huppert; a. a. O. S. 322.
12) a. a. O.

的購買力を賦與するが如き事情は、此れを國際間に求め得ざるが故である。勿論國際間の緊密なる協定は或る程度國際經濟と國民經濟との間隔を接近せしめ得るであらうが、根本的に異る兩者の社會性は其の永續性を保證し得ないのである。斯くて國際間の取引は二應爲替によつて決濟せられても、一國の對外爲替相場は終局のバランスを金によつて決濟する事によつてのみ安定せられる事となるのである。而して此れに對しては、國際バランスの決濟に金が授受せられるのは、それが貨幣として授受せられるのではなく一種の商品として授受せられると見る事も出來るであらう。[12] 或は又金本位の自働的調節作用を前提して、金流出國に再び金が還流するのは其の國の物資及び勞務が輸出せられた事に基くのであるから、金は終局的な決濟手段ではなく、究極的には物資及び勞務が眞の決濟手段であるとも言ひ得るであらう。[13] 然し乍ら、貨幣は本來社會の所產であり社會の性格が異るに從つて貨幣の本質も亦異るものと見得可く、國際的決濟手段を考察する場合にも國際經濟に於ける社會性の變革に眼を向ける事が必要なのではなからうか。斯くて若し此の事が許されるならば、現今の世界に於て進行しつゝある各共榮圈の確立と云ふ事實は、貨幣對外價値の安定と云ふ點に認められた正貨準備の意義をも亦消滅せしめ行く事となるであらう。

即ち、各國をして金本位離脫への道を走らしめた近年の世界情勢そのものが、從來正貨準備に對して認められた意義をも亦消滅せしめる事となり、正貨準備は如何なる意味に於ても通貨の價値を維持し保證するものでは無くなるのである。

五　金本位廢棄の支拂準備に與ふる意義

本位制度の金貨玉條と考へらるゝ金本位制度も其の歷史は左程に古きものではなく、精々ナポレオン戰爭以後の事に屬し、此れが世界的となつたのは漸く十九世紀後半の事である。而して此の本位制度の重要性は、所謂自

12) 楠見一正、前掲論文、四二頁。
13) 同氏、金本位自働的調節作用の吟味（經濟學雜誌、第八卷、第三號、六頁）
14) G. Cassel; Der Zusammenbruch der Goldwährung, 1937. SS. 1-2. (übergeestzt von Ders; The downfall of the goldstandard, 1936)

働的調節作用に存し、貨幣制度の上に如何なる政治的容喙をも許さないと云ふ點が高く買はれたのである。[14] 然し乍ら此の自働的節調作用と云ふものは、それが圓滑に行はれ得るが爲めには幾多の前提條件を必要としたのみならず、特に各金本位國の通貨が金のみより成るか、或は金量の增減が何れの國に於ても通貨總量の上に同比率の增減を齎らし又は少くとも同率の物價騰落を自働的に惹起するものであると云ふ想定の上に立つてゐるのである。[15] 而も現實に於ては、金量の增減と通貨總量の增減との間に一定の比例關係を維持し更に同一の速度を以て兩者の增減するが如き機構は何れの國に於ても存在せず、第一次歐洲大戰前には中央銀行の金融政策によつて漸く此の事が實現せられたが、又反對に金量の增減をして通貨總量の上に何らの影響をも及ぼさしめざるが如き政策も執られ得たのである。[16] 即ち國際的金本位制度は、本來的意味に於ける自働的調節作用を營む可き事實的基礎を缺いでゐたと言ひ得るであらう。又國際的金本位制度は、第一次歐洲大戰以前に於けるが如く、國際的自由主義國際的分業と言ふが如き好都合なる前提が存在すれば、各金本位國の協力によつて相互に其の利益を享受せしめ得たであらうが、それにしても、各國間に於ける金の配分が不公平なる限り右の如き前提は必然に覆さる可き運命を持つてゐる。即ち、各國に於ける金の生產高從つて原始的なる金保有量が自然的條件によつて運命づけられてゐるとすれば、金保有量の少き國は通貨總量に對する金の割合も小なる可く、從つて小額の金の移動によつて國內物價は著しき變動を受けるであらう。換言すれば、貨幣の對外價値の維持の爲めに其の對內價値の被る犧牲延いては其の國民經濟の被る犧牲は餘りにも大きいであらう。更に又金の素材値價について見れば、金保有量の少き國に於ける金の價値は金保有量の大なる國に於けるそれよりも大なる可きに拘はらず、偶々金が國際貨幣たるが爲めに、金による國際決濟に於て著しき不利を蒙つてゐるとも見得るであらう。而して金偏在の傾向が顯著となり右の如き不公正が資源分配の不公正と相俟つて餘りにも大きくなれば、茲に世界は國際的自由主義及び國際的分業を

15) 補見一正、前揭論文三--六頁。
16) 同上、七一八頁。Cassel; a. a. O. SS. 2-3. F. P. Schneider; Zur Theorie der Goldwährung, 1939, SS. 95-98, 103-105.

捨て、金本位離脱への道を歩むであらうからである。事實、大戰後に一旦恢復せられた金本位が一九三一年以後再び崩壞し去つたのも、右の如き事情に加ふるに國際的資本移動が餘りにも激しくなつた爲めに他ならぬのである。

然らば金本位制度の廢棄は預金支拂準備に對して如何なる意義を與へるであらうか。前述の如く金本位制度の眞の意義は國際貨幣制度に於て認めらる可く、國內貨幣に關しては金本位制下にあつた過去の時代に於ても左程の重要性が與へられてゐなかつたのである。卽ち預金支拂準備と雖も、預金通貨の價値乃至購買力を現金通貨のそれによつて、從つて究極に於ては金のそれによつて保證するが爲めのものではなく、精々、私的營利企業たる預金銀行の性格と、預金通貨の社會的な性格との矛盾を克服する爲めに、預金通貨の數量を制限する點に其の意義が認められたのである。從つて金本位が廢棄せられても預金支拂準備の意義は本質的に變るものではなく、唯現金通貨が形式上に於ても金の基礎を離れた管理通貨となる事から預金通貨も亦統一的意志による人爲的統制の對象たる形式を執らねばならぬとすれば、支拂準備の內容及び比率を統制する事によつてのみ其の實が擧げられると云ふ事から、其の統制的意義が一層明確となるに過ぎない。又若し、金本位制下に於ける預金支拂準備の意義が、預金通貨の價値を究極に於て金の價値を以て保證すると云ふ點に求められるならば、金本位の廢棄によつて支拂準備の意義は、預金通貨の數量制限による其の價値の保證に變つたと云はねばならぬが、斯かる解釋は勿論妥當と思はれない。殊に現今の我國に於けるが如く、預金通貨が量的に於てのみならず質的にも統制せられ、從つて預金銀行の性格が一變して稍ゝ公的なものとなれば、預金支拂準備は如何なる意味に於ても預金通貨の價値保證ではなくなり、其の數量制限の意義すら失ふものである。

次に發券準備に就いて見るに、金本位制下に於て正貨準備乃至金に認められたる意義が金本位の廢棄によつて完全に消滅し去る事は自明の事柄である。抑も金本位制度は、銀行券の金兌換が確保せられてゐる事によつて、

銀行券の所持者に對してそれと交換に「或る有形確實なもの」を提供すると云ふ點に、其の本質的特徴が認められてゐたのであるが、現實には英國以外の金本位諸國に於て其の當初より右の如き確證を與へ得た國はなく、專ら金準備を中央銀行に集中し、銀行券流通高に對する金準備の割合を公表する事によつて、公衆をして其の所有する銀行券が特殊の實質的な價値を持つとの信念を抱くやうに仕向けられたに過ぎない。[17] 從つて金本位制度の其の後の發展に於ても、前述の如く銀行券の價値が正貨準備たる金の價値に歸せしめ得なかつたのも當然の事であり、正貨兌換の意義が本來斯くの如きものであつたとすれば、金本位制の廢棄によつて準備乃至兌換の概念が消滅しても、それは國內通貨制度に關しては如何なる意味をも持たぬであらう。又金本位制度の下に於て正貨準備が銀行券の數量を制限すると云ふ事が前述の如く不合理であるとすれば、金本位の廢棄後に於て通貨價値の統制の爲めになさる可き銀行券數量の制限も亦、準備と言ふ觀念を離れて別個の觀點よりなさる可く、例へば現在及び將來に亙る一國の生產力乃至勞働力又は經濟活動全般と見合つて此れを行ふ可しと云はれるのも當然の事であらう。唯最後に、金本位制下の正貨準備に認められたる國際決濟の最後の手段たる意義のみは、金本位の廢棄によつて相當重大な影響を蒙るものと考へねばならぬ。卽ち此の場合に於て金に代る可きものは各國の物資及び勞務そのものでなければならず、若し國際關係が從前の如くであるならば、此等の物資勞務の交換比率は所謂購買力平價による事となるであらうし、購買力平價によるとすれば、兩當事國に於ける物價水準が必ずしも輸出入さる可き物資勞務の價格を反影せざるのみならず其の他幾多の困難を伴ふ事となるであらう。[18] 然し乍ら現在世界に於て進行しつゝあるが如き新らしき世界體勢の下に於ては、少く共各共榮圈內に於て總てのものが最大の幸福を得るが如き物資勞務の交換方法乃至比率が容易に解決せられ得可く、右の如き杞憂は自ら解消するであらう。

17) Cassel; a. a., SS. 6–7.
18) 高田保馬、經濟學新講、第三卷、三五四—三五五頁。

六　結　言

貨幣は本來社會的所產である。從つて社會の構成乃至性格が變遷するに伴つて貨幣制度及び貨幣の本質意義等も亦變化す可く、此の事は國民經濟に於ても世界經濟に於ても異らざる筈である。然るに現實には十八世紀の社會に於て要求せられた貨幣制度たる金本位制が、其の實質的內容を變へつゝも最近に至る迄名目的に維持せられ、純粹金本位制を前提とする貨幣觀を以て實質の變化したる貨幣現象を說明せんとせられてゐる。而して此の事實は各種通貨の支拂準備に於て最もよく現はれてゐるが故に、茲では支拂準備を手がかりとして右の事實を批判したのである。卽ち先づ社會の構成乃至性格は、單なる個體の集合より次第に相互の關聯が密接となり、遂に統一的一體としての性格を持つに至つたのであるが、金本位制度も亦此れに伴つて比較的完全な姿より低率金準備の制度を經て事實上の金本位離脫に近づき、遂に最近に至つて完全に崩壞する事となつたのである。蓋し貨幣はその性質上、路傍の人に對しては實質的價値あるものでなければならないが、統一的一體をなす社會成員の間に於ては實質的價値を要せず、社會的に賦與せられ又後には權力的に賦與せられる購買力への信認によつて此れに代へられ得るが故である。從つて其の間に於て、常に通貨流通性の根據を其の支拂準備の實質的價値乃至それの派生的價値に求めんとするのは誤りであり、其の時其の場所についと社會の性格より支拂準備の意義從つて其の流通性の根據を求めねばならぬであらう。

故に本稿に於ては、金本位制の名目的に維持せられた時に於ても尙通貨の價値乃至購買力は其の準備貨幣に依存するものではなく、支拂準備は通貨流通の前提たる通貨制度の秩序付けをなす點に其の意義を認めらる可き事、金本位制が必然的に崩壞す可き運命を持ちたる事情、並びに金本位の廢棄後に於て通貨價値の統制の爲めの通貨數量の統制と準備との關聯等につき、右の如き觀點よりの考察を試みた積りである。